

[研究ノート]

討議・意志決定支援のための小規模デジタル CSCW システムの運用実験

中間報告 2——教室内での匿名条件下での討議と意思決定の促進^{*1}

後藤 将之

1. 問題点

本稿は、昨年度に実施し報告した「討議・意志決定支援のための小規模デジタル CSCW システムの運用実験 中間報告」(後藤, 2012) の継続運用実験レポートである。

この研究計画では、昨年度までに、5台のネットブック PC を、有線 LAN によって小型ファイルサーバと接続し、このサーバ上の単一の書類に対して、各 PC にインストールされた Microsoft OneNote ソフトウェアを利用して、同時に、匿名的な書き込みを行わせる作業を試行し、その評価および利用者による感想を提示した。

ここまでの運用実験では、とりたてて「問題を解決する」「結論を導く」などの固定された目的を与えず、自由な書き込みを行わせていた。この状態であっても、教室内での発言が促進される効果が認められた。

しかし、本来であれば、このような CSCW (Computer Supported Cooperative Work) による討議システムは、何らかの具体的な、問題解決のための討議に利用される性質のものであろう。そこで今回は、参加者にいっそう具体的な討議のための課題を与えて、このシステム上での討議がどのような形態のものになるかを検討した。

2. 変更点

昨年度の参加者からの感想において、このよう

なシステムは、やはり「1人1台のPC環境」が準備された方が望ましい、参加しやすい、という意見が示されていた。これは当然のことで、2~3人に1台のPC環境では、その組になった複数人は、相互の書き込み内容が分かってしまい、本来の意味での匿名条件を提供していない。このため、この制約を解消すべく、使用可能なPCの台数を倍増させるように当初予算を申請した。

けれども、昨年来の円安ドル高傾向のため、輸入品である小型PCの値上がりが著しく、準備できた予算では必要な台数が確保できないことが判明した。また、学内に多く設置されているPCを借用することも考えたが、そもそも学内ネットワーク上にあるPCは、単一ファイルサーバ上の同一書類への同時書き込みを前提としてセットアップされておらず、この意味からも、PC台数の倍増は困難となった。

さらに、当初計画では、この有線LAN環境に、教員用PCを接続して、参加者の書き込みの実態を随時モニタリングする計画だった。可能であれば、教員用PC画面を、外部の大画面モニターなどへ同時出力させ、大画面でも参加者たちの書き込み実態が全員で確認できるような環境を整備する予定だった。これらについても、本運用実験が実施された2013年度前期においては、実施環境が未整備であったため、実現できなかった(2013年度後期の現状では可能となっている)。

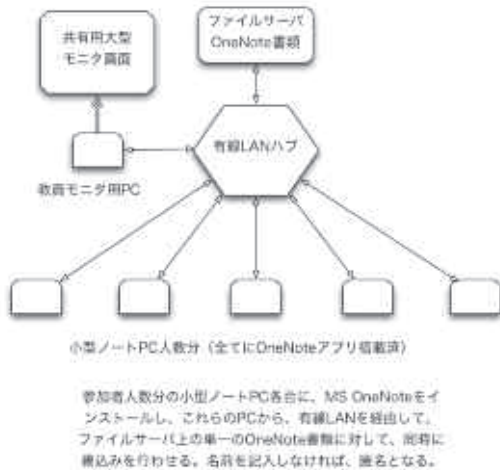


図1 本研究における小規模 CSCW システムの完成概念図

そのため、この部分のシステム整備も本運用実験では実施されなかった。

これら制約の結果として、昨年度と同一のシステム環境において、いっそう問題解決志向の討議を試行させる運用実験を実施することになった。本運用実験にて使用したシステムは、昨年度使用したものとほぼ同一である。すなわち、昨年度の研究報告から再録すれば図1の通りである。このシステムでは、Microsoft社のOfficeスイートの一部でもあるOneNoteというデジタル・ノートのソフトウェアが持っている「共有ノートブック」機能を利用して、小規模のデジタルCSCWシステムを実現している。使用した機材の品名・型番などについても、昨年度の研究報告を参照いただきたい。

これらの機材に、電源コードやLANケーブルなどをあわせて、小型の旅行用キャリーバッグに詰め込んで携行した。主要な機材であるネットブックPC1台が1.2キログラムであり、全てをキャリーバッグに詰め込んでも10キログラムに満たない重量となる。十分に個人での運用が可能だった。この実証実験では、システム総重量を切

り詰めるため、PCのACアダプターや外付けマウスなどは一切携行しなかった。ネットブックの充電は、事前に筆者の研究室にて行った。実際の設営（電源ケーブル、LANケーブルなどをつなぐ）と撤去（その逆をしてバッグに詰める）には、それぞれおよそ7~8分程度を要した。授業開始前に設営しておき、授業時間内で実施し、それについての感想をコメント用紙に記入してもらう時間のうちに撤去すれば、普通の授業時間帯でも運営は可能である（ただしある程度は忙しい作業となる）。

今回は、部分的に、演習授業の「補講」時間を利用して実施したため、時間的には比較的ゆとりをもって実施することができた。

3. システム運用実験の結果

上記のシステムを用意して、筆者の担当するマスコミ学科2年生向けの2013年度「マスコミ基礎演習」の授業内にて、2回、3~40分程度の運用実験を実施した（2013年7月3日および7月17日（補講日）に実施。なお、PC画面内の日時表示には、ネットワークタイムサーバにアクセスしていないためズレがある）。今回の実験においても、ファイルサーバ上のOneNote書類にアクセスするまでのPC操作については筆者がサポートし、記入用の共有画面が表示された段階以後について、各学生の判断にすべて任せた。ネットブックが5台のところ、演習履修者が9名だった場合、8名が2人ずつ1組で4台を使用し、残り1名は1台を専有して書き込むことになった。12名が参加した場合、教員所有のネットブック1台を追加投入し、6台に各2人ずつ割り当てて実施した。

(1) 第1実験

単に複数人での同時書き込みを試行させた昨年度の実証実験と異なり、今年度は、(1) 具体的な討議のための話題を与え、(2) それについて対立する2種類の意見をあらかじめ記入しておき、(3) どちらか一方を支持する理由を各人へに書き込ませ、(4) 相互の書き込みに対して質問・回答をする、という手続きでの「議論」を行うように指示した。

さらに具体的には、この実証実験を実施した演習の通常の授業において、ナオミ・クライン

『No Logo』のビデオ学習教材を視聴していた(同ビデオは、同題の著書としても刊行されている。Klein, 2000)。さらに、同作にも引用されている、全米労働委員会が制作し米NBC放送「デイライン」(2005)にて放送された「バーゲン・ショッピングの人的犠牲」の報道ビデオ(National Labor Committee, 2005)も視聴していた。両者とも、発展途上国における低賃金労働の実態をレポートしたものであり、先進国市場でのバーゲン品製造のため、時給17セントでアパレル縫製工場に働くバングラデシュの労働者などを

2013基礎演習ディスカッション1：バングラディッシュでの低賃金労働が、世界に（日本にも）波及する可能性について議論してみましょう。以下の意見1、2にコメントしてみてください。カーソルを置き、新規の窓に書き込む。

2013年7月3日
0:59

<p>意見1「世界中で賃金が平等になるのはいいことだ。低賃金でも暮らせる世界を目指せばいいのではないか」</p> <p>1の意見に賛成です。なぜなら、私連と同年齢の女性が1週間12ドルの収入で暮らしていくのはおかしいと思います。22</p> <p>44の方の理由を教えてください。23</p> <p>22番の方 意見1だと、共産主義的になってしまうと思う。64</p> <p>22番の方 共産主義国家は資本主義国家と違い企業同士の競い合いがなく、よって国が潤わず、独裁する人がでてきてしまいます。64</p> <p>共産主義の欠点はなんですか？22</p>	<p>意見2「生活できる最低賃金は世界中どこでも同じ一定水準が必要。低すぎる賃金は人権侵害だ」</p> <p>64番の方 企業が大変というの、2に対して賛成ですか？反対ですか？44</p> <p>2の意見に賛成です。理由としては賃金を自由に下げることができると、倫理的に問題がでてきてしまうと思います。人間を作業ロボットみたいに使うことになってしまうと思います。23</p> <p>23の方 結局は低賃金での生活というのは、発展した現在の経済環境では厳しいと思うからです。44</p>	<p>意見2に賛成 44</p> <p>44番の方 ただ意見2のデメリットをあげてみました。64</p> <p>企業が大変になってしまう。64</p> <p>2の意見に賛成です。2の意見に賛成します。1の意見では貧富の差が解消されにくく、広がるだけだと思うからです。25</p>
--	--	---

図2 第1実験の結果

取材したものだ。このタイプの国際企業は、少しでも労賃の安い土地を求めて、各国へ工場を移転させていくため、結果的に、低賃金労働を世界的に一般化させる可能性があると言われていた。「バングラデシュなら時給 17 セントなのに、なぜ東京だと時給 900 円なのか？」というのは、比較すべき諸条件を無視した問いかけではあるが、受講者に考える契機を提供するためには有効なものでもある。この点について対立する 2 つの意見に対して、支持とその理由を記入してもらい、討議してもらった結果が、次の図 2 である。

もちろん実際には、これら 2 つの意見、つまり (1) 「世界中で賃金が平等になるのはいいことだ、低賃金でも暮らせる世界を目指せばいい」および (2) 「生活できる最低賃金は世界中どこでも同じ一定水準が必要で、低すぎる賃金は人権侵害だ」は、いずれも必ずしも正確ではない。貨幣価値は各地域で相対的なものであり、土地が安く農産物が安価に入手できるならば、この部分の生活費はある程度まで削減できる。バングラデシュのダッカと日本の東京とでは、物価に大きな差がある。また、同じ関東地方であっても、50 年前前の生活水準に戻ることが可能かと問われれば、再適応に時間はかかるが、筆者ならばおそらく可能と答えるだろう（その 50 年前前の生活では、あまり肉と生魚を食べず、電気の代わりに炭や薪なども使用し、電化製品は少なく、エネルギー消費量もより低い。これは生活「水準」の問題だけでなく、生活「様式」の違いであるように思える）。とは言うものの、同じ労働時間への対価が 17 セントと 900 円 (9 ドル) ほどに相違していれば、不自然に感じるのもまた当然のことではある。

ここでは逐一、図 2 の書き込みを検討することはしないが、「正解のない質問」に対して、各種の議論が行われていることは明らかだろう。とり

わけ、「支持する理由を明記しなかった発言」に対して、その支持理由を問う質問が繰り返されるなど、議論は半ばではあるが、闊達な会話が行われる可能性が示されているといえよう。議論の流れの 1 つは、意見 1 の「賃金平等化」への基本的な賛否に関わるようで、そこの議論は、未展開ながら、根本的な経済体制のあり方にまで及んでいる。

この課題に参加者が取り組んでいるのを外部から観察した（というか、教員用 PC が準備できなかったので、事実上、教員は議論の外から観察する他になかった）。参加者の雰囲気としては、昨年度の実施時よりも、いっそう真剣さが増しているように見受けられた。具体的な討議の話題が与えられたためであろうと推測される。自分の意思表示に対する反論が、どんな形でどこからくるかわからないので、緊張感もより高そうだった。誰がこの意見を記入したのかと、周囲へ視線を投げるなどの行動も見られた。ただし、とはいっても基本的に匿名環境下であるため、過度の対人的な意識は生じていない印象だった。全体的に、緊張下ではあるが、課題そのものに真剣に取り組んでいる気配が強く感じ取れた。良好な学習態度と呼べるものだと思う。

(2) 第 2 実験

第 1 実験の良好な反応を受けて、第 2 実験を、類似の形式にて実施した。前出のクラインの議論では、「企業がまず豊かになるべきであり、その恩恵が個人に波及するものだ」という発想が批判的に検討され、それへの反動としての反・国際企業運動が起きていると論じられている。この部分に依拠して、「企業と個人、どちらが優先的に豊かになるべきか」を議題としてみた。言うまでもない古典的な対立軸であるが、討議の過程そのも

のを検討するために、この普遍的な話題をあえて議題として選択した。結果は図3に示す通りである。

この結果についても、書き込みを逐一検討することはあえて行わない。ただし、ここでもある程度自由な意見の表明と交換は行われているといえ

2013基礎演習ディスカッション2：ビデオで論じられていた「企業と個人、どちらが優先的に豊かになるべきか」を議論してみましよう。以下の意見1、2にコメントし、それに反論や疑問を追加してってください。

2013年7月17日
21:15

意見1「個人は弱いものだから、企業に守ってもらい必要がある。社会保障では、最低限の水準しか保障されない。多くの人をよりよく守るために、企業がまず豊かになるべきだ」

意見2「個人は弱いものだから、最低限の生活を社会が保障する必要がある。企業勤め人だけ保障されるのはおかしい。多くの人が最低限度の生活を保障されるように、個人がまず豊かになるべきだ」

1：会社が強くなっても個人に還元されないの意味ないよねー(96)
96の人は、2に賛成ということですか？(33)

2：意見1では企業勤めの人しか豊かにならないと思います。(29)

1：個人が豊かになるためには企業が豊かになる必要があると思う。(33)

1、2：個人って、そんなに弱いのか？(M)

2に賛成。(21)人間として最低限の生活を送ることは人間の一つの権利だと思うから。

企業が豊かになっても個人一人一人に還元される状況って少ないと思う。(13)

96の人
個人に利益を与えるのは企業なので
は??33

56の人
確かにそういうこともあると思います
(33)

M：いきなり前提崩しですか？(Y)

>>33
2に全面的に賛成という意味ではなく、どちらも言えるよねって感じかな。
ただ2005年ごろから日本の景気は全体的に好調だったはずなのに一般の人には還元されてなかった。
たとえば企業が豊かになってもそれでは意味がないって思うのですよ(96)

2に賛成。まず個人が豊かになれば企業も豊かになると思う(26)

2に賛成です。企業を優先する考え方は企業の上の人間ほど豊かになって役職が下の人間は企業の都合によって動かされ賃金もひくくなるだろうから56

どちらかという2の方に賛成な気がする。働かない人も保証される、と思うと自分が働いてた場合いい気はしないかもしれないけど、理由があって働けない人もいるのかと思うとある程度の保証は必要なと。(S)

>>33
まあ確かにその通りなんですが、その還元率が企業の実績に比例していないような感じがするんですよ。(96)

2：働かざる者食うべからずってのはあると思う。でも自分で生活できないレベルの人を保障する制度は必要だとも思う。そういった意味では2に賛成(96)

方次第で個人の利益が左右されてしまう気がします。(29)

33：根本的な問題になってしましますが、そもそも自社の利益より個人を優先する企業はあるのでしょうか？(29)

企業の利益は個人からくるけど、個人の利益はどこからくるのでしょうか？企業に頼らないのだったら
自営業するとかしかないのでしょうか
33

96
確かにそうですねー
そこを企業がなんとかしてくれれば
いいですね33

図3 第2実験の結果

よう。部分的に、冒頭の「対立する意見」そのものへの反論もみられ、それへの指摘もまたみられる。もちろん、そもそも正解が1つではない問題について、「ありがちな」「代表的な」対立する意見を冒頭に例示しているのだから、それ自体への反論が出ることもむしろ当然であろう。これらの書き込みは、考えようによっては「すでに誰かが通った道」であり、「十分に考え尽くされていないもの」でもありうる。しかし、この試行運用においては、むしろ、そのような「個々の意見の通史的な独創的や徹底性」は問題としなかった。「どのようにストレスなく意見が表明できるか」「どのように無理なく討議が実行できるか」をこそ問題とした。

結果は図3に示されているので、その詳細な判断は読者にゆだねたいが、部分的に、現実の対面的な討論状況よりも、いっそう「自然」な意見の発露が認められるとすら言っているのではないかとみえる。とりわけ今回議題とした労働環境の問題は、参加者である学生にとって切実な身近な話題であることから、おのずと討論は熱心なものになっていったようである。

一切のマニュアルもなしに、簡単な口頭説明だけで、この程度の討議が実施できてしまうのは、PCソフトの使いやすさだけが原因ではなく、むしろ、条件さえ整えば、学生がどれほど熱心に議論に参加してくるか、あるいは対人コミュニケーション過程を必要としているかを、如実に示しているものではないかと考えられる。他方、タイムミスとみえる部分が存在したり、書き込み相互の関連がやや混乱してみえる部分もある。

文末に付した参加者からのコメントにもあるが、今年度もまた、「どうしても個々のコメントが重なって読みにくくなってしまうこと」への指摘がみられた（ただし、この問題は、参加者同士

の適宜の調整（マウス操作で書き込みをずらして参照し、追加書き込みしていく）によって、ほぼ解決されていた）。また、「匿名状態はそれとして、どの匿名が、次にどの書き込みをしているかを知りたい、つまりいわばハンドルネームを一貫して表示してほしい」という意味の指摘もあった。ここで使用している OneNote の書き込み画面は自由度が極めて高いので、ほとんどどの位置にでも、新たに書き込み欄を開いて、コメントを追加していける。その意味で、ネット上の掲示板や一部の SNS サービスなどと比較しても、いっそう柔軟な「会話」を可能としている。だが、この特性ゆえに、かえって、「誰がどこに何を」書き込んでいるかが、分かりにくくなってしまいう可能性もある（今回も、とりたてて司会役の参加者を指名しないままに実施している）。参加者たちは独自に自分の書き込みに「署名」類似のマークを記入しているが、それが完全に行われてはいなかった。このような手続きをいっそう簡単に実施できるようにすべきだろう。そのためには、司会役、整理役を立てることに加えて、やはり1人1台の環境が必須であろう。

4. 考察と今後の課題

昨年度よりも、いっそう目的の絞られた「討議」を意図して小規模な CSCW システムの運用実験を実施した。結果を要約すれば、

第1に、今回も、受講者が、なかなかみられない熱心さで本システムを利用したことは間違いないだろう。新奇なメディアの面白さという部分を割り引いても、これだけ熱心な、しかもあまり緊張しない授業への参加がみられることは珍しいといえる。参加者の個性や教室の雰囲気にも依存するが、このような部分的に匿名的な討論環境は、有効に利用できるものだろう。

第2に、一定の議論のテーマを与え、それについて事前に学習する機会があり、また分かりやすい対立軸が設定されていれば、多くの参加者は、ほとんど躊躇することなく、それについての討議に参加できるようだ。自由度の高いシステムを利用しているので、議論は色々な方向へ進んだり戻ったり、やや混乱したりするが、それでも参加度そのものは低下していない。ただし、一定の結論に収束するまでに至っていないのも事実である。とはいえ、この辺りは時間的・空間的・設備的な制約による部分も大きいと考えられる。

本運用実験では、便宜的に、有線LANによって1部屋に繋がれた一時的なシステムとして運用しているが、実際には、これを、常時稼働している無線LAN上のシステムとして運用することも可能である。じっさい、OneNoteソフトウェア自体は、すでに各種の小型携帯端末(iOS/Android)上の無料ソフトウェアとしても供給されている。一定期間にわたって無線LAN経由で書き込みが可能なシステム上にて、各人ができる時に、使える資料やデータなどを随時参照し、それらの出典をも明記して議論していけるならば、いっそう複雑な議論や、議論を収束させていくことも可能となるかもしれない。その場合には、議論の整理役なども必要となるだろう。本研究は、あくまで現状で使用可能な資源を用いた短期の試行的運用である。

第3に、意思表示や参加の自由度が高いだけ、かえって、記入者の一貫性(特定の個人が記入していること)を明示する必要も高まるようだ。活発な意見交換であればそれだけ、「誰が何を以前に言ったか」が判明している必要も高くなって当然だろう。このあたりは、記入上の混乱もみられた。もう少しうまくシステムを設定するべきだろう。

第4に、やはり1人1台のPC環境は必須である。そうでないと、このシステムが可能にする「パーソナルな」特性そのものが損なわれてしまう。この意味で十分なシステムによる試行はいまだ実施できていないが、その場合には、さらに大きな参加度や没入度がみられるものと予想される。筆者はほとんど利用しないのだが、PCゲームなどの場合にも、それへの没入度が高いのは、それが面白いゲームである、という事のほかに、それがパーソナルな参加性を持っているからだ、という理由もあるものと考えている。

第5に、議論がこの程度まで複雑なものになると、もはや小型ネットブックPCの小さな液晶画面では、対応しきれていないようだ。頻繁なスクロールがみられた。ネットブックは速度が遅く、9インチの1024×600ドットほどの表示画面しかもたない。もはやこれでは対応しがたい程度に、頻繁な書き込みが行われている(このこともまた、追加のネットブックを導入しなかった理由だった)。一般的なノートPC程度の機材を準備しなくては、もはやこのような多くの書き込みが行われる課題には対応することが難しいようだ。

散発的ながら、2年度にわたる運用実験を通して、このタイプのCSCWシステムのもつ可能性を示唆することができたと考える。機会があれば、以上の諸問題に留意しつつ、さらなる運用実験を実施して、最終的には、「討議を収束させて、一定の信頼できる結論を導く」ことまでを目的としたい。昨今、「集合知」「クラウドソーシング」「スマートモブ」等の有効利用についての議論を多く耳にする。これら新しい形態の共同作業について考察するためにも、それと類同の形式をもった本システムの運用実験は有効であると考えられる*2。

参考文献

後藤将之, 「討議・意志決定支援のための小規模 CSCW システムの運用実験 中間報告 教室内での匿名条件下での討議への参加の促進効果について」『コミュニケーション紀要』, 第 24 輯, 57~76 頁, 成城大学大学院文学研究科, 2013 年.

Howe, J., *Crowdsourcing: Why the Power of the Crowd Is Driving the Future of Business*, Three Rivers Press, 2008.

Klein, N., *No Logo: No Space, No Choice, No Jobs, Taking Aim at the Brand Bullies*, Picador, 2000.

Klein, N., *No Logo: Brands, Globalization & Resistance*, Media Education Foundation, DVD, 2003.

Levy, P., *Collective Intelligence: Mankind's Emerging World in Cyberspace*, Perseus, 1997.

National Labor Committee, *Human Cost Behind Bargain Shopping*, broadcasted by NBC Dateline 2005 (Video CD).

Rheingold, H., *Smart Mobs: The Next Social Revolution*, Basic Books, 2002.

* 1 本研究は, 2013 年度成城大学特別研究助成(研究課題「討議・意志決定支援のための小規模 CSCW システムの運用実験」)の助成を受けて実施されました。

* 2 本研究実施のために, ハードウェアの選択などについて, 本学メディアネットワークセンターからアドバイスを受けました。また, 2013 年度の筆者担当「マスコミ基礎演習」履修生の皆さんから実験実施上の協力を受けました。記して深謝します。

付録 実験協力学生からのコメント

(1) コメント用紙によるコメント

(本論に関連する部分のみ抜き書きした。若干, 誤字などを修正した部分がある。)

・おもしろいシステムだと思いました。口頭ではなかなか発言しにくいこともあるのでこれだと

発言もできるようなのでいいと思います。

かぶってしまうのが少し見にくいところもあるかなと思いました。

最後に数字か署名で表すのはわかりにくいなと思いました。ボックスの色を変えるとかの方法があるのかな, と思いました。

・初めて one note の存在を知りましたが, とても面白いと思いました。ただ意見をこの one note 上でまとめるのは大変そうだなと感じました。

今回の議題は少し難しかったです。意見 1 でも意見 2 でも誰かが不利益をこうむってしまう, とてもナイーブなものだと思いました。片方の意見に賛成だと思っても, 他の皆さんの意見をみると, もう片方の意見も一理あると考えてしまいました。また, 他の皆さんの意見がしっかりしていて, すごいと思ってしまいました。

・これまで one note を使ったことがなかったので, とても興味深かったです。意見を皆で共有して, そこに反応するということは実際に口で行うディスカッションより, 色々な人の意見が絶えず聞けて良いと思いました。また, 全体で問題をつきつめていく過程が目で見れて面白かったです。

時系列が分かるようになれば更に良くなると思います。また, 意見ごとに数字を変えている人がいたので, あらかじめふりわっておくとやりやすいと感じました。

・インターネットの掲示板のように匿名でやりとりをするのは面白いと思った。直接口で, 面と向かってやりとりをするのが性格的に苦手であるが, これだと少し疑問に思ったところはすぐに聞くことが出来て良いと思った。

・PC を使ったディスカッションはあまり周囲を

気にせずコメントができるので良いと思います。

ただやはり2人で見ているとその2人の間で声でコミュニケーションを取るの、ある程度は周りに何を発言しているのか知られてしまうことになると思います。

また、誰が自分の意見に反応しているのかが非常にわかりにくいので、何番が自分に意見したのかなどがわかるようになるとより使いやすいと思います。

- ・匿名で色々な人と議論をすることができるため、自分の思ったことをためらいなく発言できて、おもしろかったです。本当に思っている意見を聞ける機会は非常に少ないと思うし、またこのような形で議論をしたいと強く思いました。
- ・匿名でコンピュータ上で会話するのは初めての経験だったので、すごく楽しかったです。普

段、授業を受けて、自分の感想をコメントページに書くだけで、他の人の意見を聞く機会は無かったので、すごく参考になりました。

- ・掲示板を複雑化した感じだった。イメージしていたものより面白い。顔が見えない状態で意見が言いあえるシステムは日本人にはとても適応していると思う。このシステムを他の小人数の授業や他のテーマでもやってほしい。
- ・議論をする際に、こういった形式の方が面と向かって言うより意見が言いやすいと感じました。

賃金の話は人によって捉え方が違ってくるタイプのもので、意見がいきに見れるのは、どの意見が多い少ないなどもはあくできるし良いと思いました。

今回の問題でも企業を重視するか、人権を重視するか、いろいろな意見が出ましたが、私は人権を重視したいと思いました。

(2) 本システム使用によるコメント(図4)

2013前期基礎演習：この基礎演習を受けてみての感想を自由に記入してください。誰かの書き込みにコメントしてもかまいません。

2013年7月17日
21:22

いつもは聞けない個人の意見がたくさん聞けてよかったと思う。
また匿名なので書き込みやすい。26

日本人には適正だと思う

みんなの好きなチャットっぽい感じが
気軽に自分の意見を表現しやすくさせて
ると思う。匿名性のいいところだと思
う。少なくとも私はこのやり方は好き
き。

匿名で議論ができることで、自分の言いたいことを遠慮せず言えたので、このシステムは非常に
いいと思いました。

今日のPCテストの書き込みが画面のどこにでも書いてしまうというのが逆に見づら
かったように感じた。コメントとコメントがかぶってしまっていることが多かった。
それが見にくかったがそれ以外は特に気になることはなかった。

生徒間だけで1つの議題について話し合うことは大学ではなかなか出来ないのが良かったと思います。

自分の意見に関して、誰が、どんな意見をしてくれるのが楽しいと思った。
また、どんな意見が出てくるのかも楽しみだった。

意見を素直に言うことができ、
いいと思った

大学の授業では正解がないことに向かって議論することが多いのでこのやり方はあっていると思
います。相手の顔を見ずに意見できるので素直な意見が言えると思うし、意見を一気に総覧でき
るのも議論にあっていると思いました。

普段のマスコミ学科の授業では議論しない内容を議論できて、色々な人たちの意見が聞けて興味深かっ
たです。

授業のやり方を少し工夫するだけで授業内容に充実感を感ずるのはほんとに不思議。

この方法で議論を行うのは匿名性が高いので素直に意見を言えてよいと思います。
ただ全員分のPCがないと自分のコメントを常にもう1人と共有することとなるので、できれば
1人に1台のPCがあるとよいと思います。

もしこの方法を全面的に導入されるのであれば、少し通常の授業中に見る映像の量を減らして
でも1つ1つの課題に対して深い議論をした方がより楽しく授業を受けられると思います。

図4 この授業へのコメント

Research Note: Middle-Stage Report of Operational Experiment of a Small-Size Digital CSCW System for Discussion and Decision-Making, Part 2—How It Facilitates Discussion and Decision-Making Under Anonymous Situation in Classroom

GOTO Masayuki

Abstract

A small CSCW (Computer Supported Cooperative Work) system was constructed, based on Microsoft's OneNote software's notebook sharing function, in order to facilitate students' participation to discussion and decision-making process in classroom seminars. Operational experiments were conducted in the author's sophomore seminar classes twice in 2013, using mostly the same equipment as last year's experimentation. Due to some resource limitations, "one PC for one student" situation was not realized again this year, but students' active participations were generally greatly facilitated, with the same pretty positive user-responses obtained after the experiments. To repeat, the author's point is that in some social settings like undergraduate level seminars where everyone knows every other, certain anonymous situation is rather suitable for accelerating careful and self-and-other-oriented student's participation into discussion, because it can reduce social pressure that accompanies saying something in front of the acquaintance. In this operational experimentation too, certain facilitation of discussion among students was clearly observed, with active interchanges among members, although no definite conclusion or decision-making was achieved in this limited time period (one session for 30 or 40 minutes). Further operational experimentation seems needed for more detailed examination of conditions that can lead to decision-making among participants in classroom discussions.

KEYWORDS: social communication process, digital media, CSCW, crowdsourcing, decision-making, anonymous environment